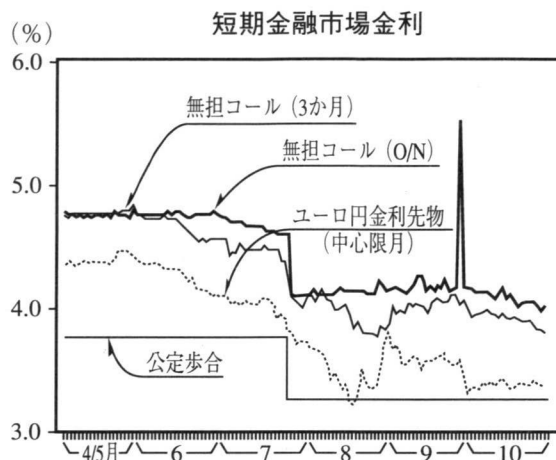


金 融 市 場 動 向 （平成 4 年10月）

1. 短期金融市場

10月中のオーバーナイト・レート（無担コール）、ターム物レートはともに月中を通じて弱含みで推移。この間、ユーロ円金利先物（金利ベース）は、総じて安定的に推移した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は42兆7,209億円と前月（41兆3,394億円）を上回った。

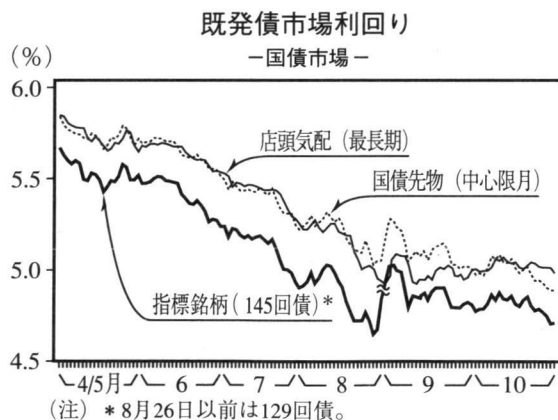


2. 資本市場

10月の国債利回り（145回債）は、上・中旬中、小動きの展開となった後、下旬入り後は金利先安期待の高まり等を背景に徐々に低下、結局4.710%（前月末4.810%）で越月した（国債先物中心限月4.885%＜前月末5.017%＞）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）、先物ともに前月を下回った。

株式市況（日経平均株価）は、企業業績悪化懸念の強まり等を映じて下落、16,767円（前月末比△632円）で越月した。この間、株式出来高（東証第1部月中1営業日平均）は、2.18億株と前月（3.94億株）を下回った。



起債動向をみると、長期国債（11月債、10年＜価格競争入札分＞）は、落ち着いた応札となった（10月22日入札分：募入平均利回り4.964%、応募倍率2.69倍）。また、短期国債については、上旬中のやや軟調な市況を背景に幾分慎重な応札をみた（10月7日入札分＜6か月もの＞：募入平均利回り3.505%、応募倍率1.82倍）。

エクイティ市場での発行（10月払込み分、国内市場発行分）は、前月を上回ったものの、株式市場の低迷等から引続き低水準にとどまった。

国内公募事業債の発行は、前月を上回った（9月1,200億円→10月3,150億円）。

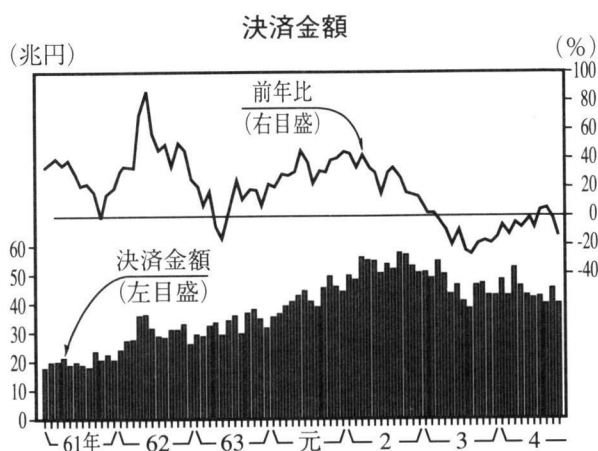
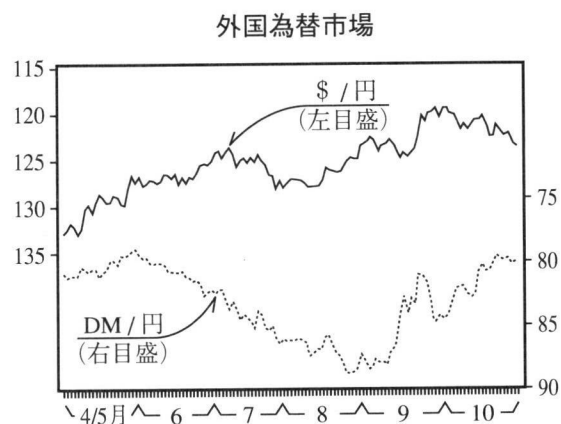
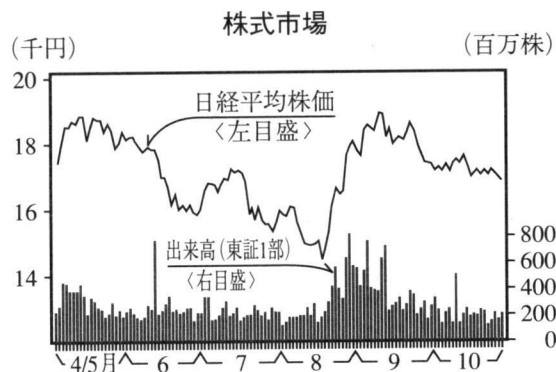
3. 外国為替市場

10月の円相場（対米ドル直物相場、終値）は、上・中旬中、米国金融緩和観測の高まり等から強含む局面もみられたものの、月央以降、米国長期金利上昇観測等から123円台まで下落、結局123.35円で越月した（前月末119.25円）。また、円の対マルク相場（ニューヨーク市場、終値）は、独金融緩和期待の台頭を背景としたDM急落に伴い、月中を通じて上伸基調で推移、結局80.03円で越月した（前月末84.91円）。

この間、外国為替市場出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は156.4億ドルと、前月（185.8億ドル）を下回った。

4. 決 済

10月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、日本銀行当座預金受払額は前年を上回った（日本銀行当座預金受払：前年比+5.9%）が、手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高はそれぞれ前年を下回った（手形交換：前年比△19.5%、全銀システム：同△8.3%、外為円決済：同△12.5%）。また、国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振決口座振替）は、移転登録、振決口座振替ともに前年に比べて増加した（移転登録：前年比+2.5%、振決口座振替：同+101.4%）。



- (注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

10月の資金需給をみると、銀行券要因が2,746億円の不足（前年余剰2,496億円）となった一方、財政等要因は、源泉所得税を中心とする税揚げ等がみられたものの、割金債引受けを主因とする運用部の支払いが多額に上ったほか、保険・社会保障等の支払いがかさんだため、2兆2,500億円の余剰（前年不足9,723億円）となり、全体では1兆9,754億円の余剰（前年不足7,227億円）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B売却等により資金を吸収した。

11月の資金需給（国債発行織込み前）については、銀行券要因が4,000億円程度の不足（前年同438億円）となる一方、財政等要因については源泉所得税を中心とする税揚げや厚生保険料の受入れが見込まれるものの、交付金の支払い等がかさむことから、5兆1,500億円程度の余剰（前年同6兆3,235億円）となる見通し。この結果、全体では4兆7,500億円程度の資金余剰（前年同6兆2,797億円）と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

9月のM₂+C D平残前年比伸び率は△0.4%と前月比0.7%ポイント低下した。これは、貸出の伸び率が引続き低下したほか、財政要因（税揚げの増加など）等がマネー押下げに働いたことによるもの。通貨種類別にみると、預金通貨、準通貨、C Dいずれも伸び率を低下させた。

また、広義流動性の平残前年比伸び率は+2.8%と前月比0.4%ポイント低下した。

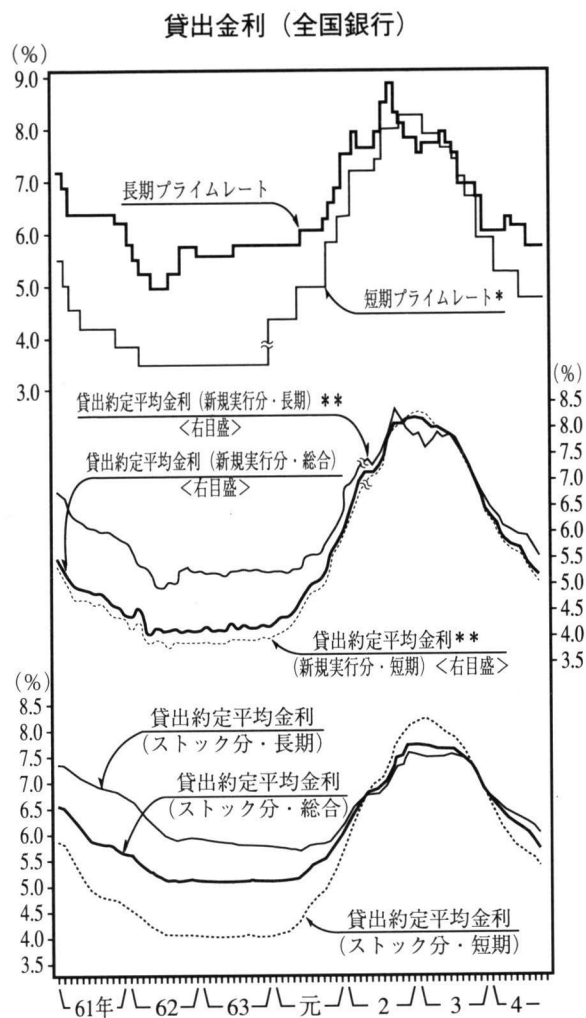
10月の銀行券平残前年比は+3.0%と前月（同+2.6%）を上回った。

10月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀II）は、前年比△1.5%と4か月連続の前年割れとなった。また、貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀II）は、前年比+2.2%と前月比横ばいとなった。

7. 貸出・預金金利

9月中の貸出約定平均金利（新規実行分、全国銀行）をみると、短期金利が8月の短期プライムレート引下げの浸透から低下した（△0.176%）ほか、長期金利も長期プライムレートの引下げ（△0.4%）を映じて低下した（△0.170%）ため、総合でも低下傾向を持続した（8月5.362%→9月5.196%）。この結果、貸出約定平均金利（ストック分、全国銀行）も、短期（△0.187%）、長期（△0.119%）、総合（8月5.998%→9月5.854%）のいずれも前月比低下した。

この間、9月の自由金利定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比低下した（8月3.603%→9月3.506%）。



(注) * 元年1月以降は都市銀行の中で最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 2年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

（平成4年11月12日、調査統計局）